

読書

少子高齢社会のみえない格差

白波瀬 佐和子著

少子高齢化で家族による扶養システムは崩壊しつつある。女性の就業率が高まって、女性の働く場や家庭での地位も変化した。世の中はますます不平等化している。女性の高学歴化は未婚を促している。親に寄生するパラサイトシングルが増えている……。

多くの人々はこうした社会に関する印象論に同意するだろう。しかし本当に事実を反映しているのだろうか。著者は「く化」と表現される社会経済現象は、「かなり画一的かつ安易なイメージを伴って人々の意識に浸透しがち」であると指摘、「く化」と表現される通説が事実かどうかを、データをもとに緻密に再検証していく。

著者の問題意識は大きく三つに分けることができる。少子高齢化は年金問題をはじめ、世代間の対立をもたらしていると考えられるが、親子というミクロな世代間も対立関係になりつつあるのか。女



少子高齢社会のみえない格差

(東京大学出版会・三、八〇〇円)

▼しらはせ・さわこ 58年生まれ。オックスフォード大学で博士号。筑波大学助教授。

変わる気配ない規範に注目

性の就業者が増えているが、労働の場や世帯におけるジェンダー関係は変化したのか。高齢化に伴い世の中は一段と不平等化したのか——の三点である。

データから得られた回答は、いずれについても「ノー」である。親子扶助は九〇年代に入ってからも続いている。女性の家庭外就業が増えたからといって家族の機能は衰えていないし、ジェンダー関係にも大きな変化は認められない。結婚パターンも高学歴同士、低学歴同士が依然として多く、出身階層が重要である。また九〇年代に入り、人々が不平等を実感した割に、所得格差はさほど拡大していない事実も明かされる。

少子高齢化社会の議論ではとかく変化ばかりが強調されがちだ。しかし、簡単には変わる気配がない基層的な社会規範や階層パターンがむしろ重要であり、それが見えない格差として残っていると著者は主張する。つまり、簡単には変わらない格差部分があるからこそ、少子高齢化というショックが社会に引き起こす「きしみ」はより大きくなるのである。一部、データーの限界から人々の行動と意識の間の因果関係と相関関係を区別しにくいところがあるが、全体に学者の良心を感じさせる、信頼できる本である。

大阪大学教授 大竹 文雄